

平成 30 (2018) 年 6 月 3 日 (日)

平成 30 年度 和歌山県バスケットボール協会リフレッシュ研修
U12・U15 指導者講習会「マンツーマン推進について」

JBA マンツーマン推進プロジェクト 指導部

JBA 技術委員会 ユース育成部

日本ミニバスケットボール連盟 普及技術委員長

牧野 広良

1. 第 49 回全国ミニバスケットボール大会のまとめ

(1) 赤旗 (警告) 93 回 (1 試合平均=0.64 チーム平均=0.97 回/3 試合)

①赤旗 (警告) なし=6

②赤旗 (警告) 1 回=14

③テクニカルファウル 15 回⇒赤旗 4 回以上が 6

④ブロック別赤旗

北海道ブロック=0 回

四国ブロック=5 回・・・1 県当たり 0.625

北信越ブロック=7 回・・・1 県当たり 0.7

東北ブロック=9 回・・・1 県あたり 0.75

近畿ブロック=11 回・・・1 府県当たり 0.92

九州ブロック=15 回・・・1 県当たり 0.94

関東ブロック=18 回・・・1 都県当たり 1.13

中国ブロック=14 回・・・1 県当たり 1.4

東海ブロック=14 回・・・1 県当たり 1.75

(2) リスペクトキャンペーン

1 件は指導に値する内容であったため、事後指導ではあるものの、該当のブロック長の指導により該当チームにご指導頂き、ミニバスケットボールの精神に賛同いただいた。

2. 第 49 回コミッショナー取りまとめ

(1) 伝達の円滑性を保つ

①アクション

②わかりやすく簡潔な説明

③推進につながるコミュニケーション

(2) 根拠の裏付けを持つ

①振る勇気・振らない勇気

- (3) タイムリーな判定を心掛ける
 - ①最初の事象を見逃さない
 - ②黄色旗⇒赤旗のタイミング
- (4) 基準規則の熟知を徹底する
 - ①ヘルプか否か・トラップか否か
 - ②プレーヤー・ベンチの意思
 - ③毅然たる態度と平等性
- (5) 審判との連携を密にする

3. 基準規則を軸とした統一した判定におけるまとめ

- (1) マッチアップ・・・誰とマッチアップしているか明確でなければならない。またそれがコミッショナーにわかること。
- (2) プレスディフェンス・・・ローテーション後のピックアップを確実に行う。
- (3) オンボールディフェンス・・・マッチアップエリアにおいての距離は最大1.5 m。
- (4) オフボールディフェンス・・・制限区域以外のオフボールのポジションでトラップをすることは違反である。
- (5) ヘルプローターション・・・オンボールが抜かれた場合と、オフボールのオフense側プレーヤーがゴールヘカットし抜かれた場合は、ヘルプできる。
- (6) スイッチ・・・オフボールのポジションチェンジに対するスイッチは違反である。
- (7) トラップ・・・ボールをスティールできる距離に於ける数的優位な守り方。

*トラップが仕掛けられる3つの場面

- I. ドリブルが行われている時、または終わった時。
- II. パスが空中にある間に移動し、トラップが成立する時。
- III. 移動が容易に行える距離にある時、ボールマンと自分のマークマンの距離の目安が2～3 mの時。

4. ポイントとなる事象

- (1) トラップと2人で守ること(ダブルチーム)の違い。
- (2) 現象が改善されなければ、黄旗は赤旗に移行する。
- (3) アイソレーションに対しての考え方。
- (4) マッチアップを見ないケース(首振りも含め)はイリーガルである。その時シュートやカットヘルプの状況がおきているかどうか見極めることが大切。
- (5) 黄色旗・赤旗のあげる基準に、同じ現象か違う現象か、同じ選手か違う選手かということは含まれない。

5. マンツーマンディフェンス基準規則の変更 (2018年4月1日～)

(1) オフボールディフェンス

全てのポジションで、ボールを持っていないオフense側プレーヤーをトラップすることは違反である。ただし、制限区域内において、予測に基づいてボールを持っていないオフense側プレーヤーをトラップすることは許される。

またスローイン時(サイド・エンド両方)においてのみ、スローインをするプレーヤーにマッチアップするディフェンス側プレーヤーが、1.5メートル以内のマッチアップの距離制限を超えて制限区域内のオフボールプレーヤーをトラップすることは許される。

(2) 基準規則違反の罰則

①マンツーマン基準規則違反で「赤旗(警告)」の旗が上げられた時は、コミッショナーが、違反對象となった攻防のボールのコントロールが変わった時およびボールがデッドになった時にゲームクロックを止めて、違反行為に対する処置を行う。審判およびオフィシャルを行う児童・生徒が判断するものではなく、コミッショナーが判断して行う処置である。

②マンツーマンコミッショナーの任務

*「赤色(警告)」の旗が掲げられた場合、コミッショナーはボールの保持が変わった時およびボールがデッドになった時に速やかにホイッスル・ブザー等で審判に知らせてゲームを止める。オフィシャルはホイッスル・ブザー等と同時にゲームクロックを止める。ゲームを止めた後は、赤旗に関する処置を行う。

■ボールのチームコントロールが変わる時(ボールの保持が変わる時)

- ・ オフense側自身のミスやディフェンス側がスティールすることにより、ディフェンス側がボールをコントロールした時
- ・ ディフェンスリバウンドをコントロールした時
- ・ フィールドゴール成功時
- ・ ファウル・バイオレーションが起こった時

■ボールは次のときにデッドになる

- ・ フィールドゴールあるいはフリースローが成功した時
- ・ ボールがライブで審判が笛を鳴らした時
- ・ フリースローでボールがバスケットに入らないことが明らかになり、その後:
 - あとにフリースローが続く時
 - 別の罰則(フリースローやボールのポゼッション)がある時
- ・ ピリオド終了のゲームクロックのブザーが鳴った時
- ・ チームがボールをコントロールしている間にショットクロックのブザーが鳴った時

【補足】ただし、ショットクロックのブザーが誤って鳴った時は除く。

- ・ ショットされたボールが空中にある間に次のいずれかが起こった後で、どちらかのチームのプレーヤーがボールに触れた時:
 - 審判が笛を鳴らした後

-ピリオド終了のゲームクロックのブザーが鳴った後

-ショットクロックのブザーが鳴った後

(具体的な対応)

- ・ 防御側がボールを獲得した時は、ゲームを止める。
- ・ 攻撃側が得点を取った時は、得点を認め、ゲームを止める。
- ・ 攻撃側がオフェンスリバウンドを取った時は、まだボール保持があり得点を取る機会が継続しているためゲームは止めない。
- ・ 審判が笛を鳴らした時は、ゲームを止める。
- ・ プレーが止まるまでに起きたことは全て記録する。

6. ルールの変更の概要

(1) トラベリングの変更点に関して

- ①止まった状態でボールをコントロールしている場合
- ②動きながら、足がフロアについた状態で、ボールをコントロールした場合
- ③明らかに空中でボールをコントロールした場合

(2) アンスポーツマンライクファウル (起きた現象のみで判断) について

- ①ボールに対するプレーでなく、かつ、正当なバスケットボールのプレーと認められないと審判が判定したプレー
- ②ボールプレーでも過度に激しい触れ合い
- ③オフェンスが進行する中で、その進行を妨げる事を目的としたディフェンスのプレーヤーによる必要のない触れ合い
- ④ラストプレーヤーズスチュエーションで速攻を止めるための後方もしくは横から起こす触れ合い
- ⑤残り2分 (4Q・延長) でスローインするとき (審判の手にある時も) のコート上のディフェンスのプレーヤーのファウル

(3) フェイクについて

ファウルをされたように見せかけるプレー

- ①ノーコンタクトは1発でTF
- ②同じチームの選手2回目はTF

7. 実技講習

技術的側面から考えた新ルールにおける実技のポイント

【資料Ⅱ】

1. U12 と U15 におけるマンツーマンディフェンス基準規則・運用面の違い

(1) ゲーム終了間際（第4ピリオド・延長時限）残り2分を切ったからの違反行為（赤色の旗・警告）について

→1回目の警告でもテクニカル・ファウルの対象とする。ただし、U12（以下：ミニバスケットボール）においては適用しない。

(2) 2回目の赤い旗が上げられた場合

→赤い旗が上がり、それが同じチームの2回目以降の違反行為の場合は、最初にゲームクロックが止まった際、主審はTO席の前に両チームのコーチを集め、コミッショナーからの説明後に、当該コーチに対しテクニカル・ファウルを宣す。

※相手チームに1個（ミニバスケットボールにおいては2個）のフリースローとスローインを与える。

(3) 他の罰則によるフリースローがある場合

＝他の行為による罰則と基準規則違反による罰則（テクニカル・ファウル）が重なった場合＝

→他の罰則によりフリースローが与えられるときは、コミッショナーによる説明を行った後、他の罰則の処置を行い、最後に、基準規則違反によるテクニカル・ファウルの罰則を適用する。

《注意》

基準規則違反によるテクニカル・ファウルの罰則が適用される前に、新たに別のテクニカル・ファウルが宣せられた場合など、罰則の重さが等しい場合は競技規則第42条『特別な処置をする場合』に従い、処置をする。

但し、ミニバスケットボールでの適用については、「友情・ほほえみ・フェアプレイの精神」により、全て罰則を平等に適用することが望ましいとの考えから、競技規則第42条を適用せずに、起きた順序に従ってすべてのフリースローを行う。

→それぞれの罰則に含まれているスローインは取り消され、最後の処置（基準規則違反のテクニカル・ファウル）の罰則に含まれるスローインでゲームを再開する。

(4) 試合の勝利を意識しての意図的なイリーガルディフェンス

→1回目の警告でテクニカル・ファウルとなる。

※本項は、ミニバスケットボールにおいては適用しない。

(5) 基準規則違反によるテクニカル・ファウルの場合

→コーチ自身のファウルとして記録し、チーム・ファウルに数えない。（スコアシートにはコーチの欄に「C」と記録する。但し、ミニバスケットボールでは「T」と記録する）

(6) コーチ自身にテクニカル・ファウルが2回記録された場合

→コーチは失格・退場になる。(競技規則第36条)

*ミニバスケットボールにおいては、退場とならない。

(7) 各ピリオド(延長時限を含む)の終了間際に違反行為が生じ、コミッショナーの旗

(赤色)が上がり、そのままゲームクロックが止まらずに各ピリオドが終了した場合

→その警告および罰則はすべて有効とする。ただし、トーナメント戦の第4ピリオド

または各延長時限の終了時において、テクニカル・ファウルの罰則によるフリースロー

を行っても勝敗に影響がない場合は、テクニカル・ファウルを適用しない。なお、

ただし以降は、ミニバスケットボールにおいては適用しない。

<勝敗に影響がない場合>

・第4ピリオドまたは各延長時限の終了時において、得点の多いチームにフリースローが与えられる場合

・第4ピリオドまたは各延長時限の終了時において、得点の少ないチームにフリースローが与えられるが、得点差が2点以上離れている場合

(8) ゲーム終了間際(第4ピリオド・延長時限)残り2分を切ったからの違反行為(赤色の旗・警告)について

→1回目の警告でもテクニカル・ファウルの対象とする。ただし、ミニバスケットボールにおいては適用しない。

(9) トラップについて(「マンツーマンディフェンスの基準規則 2. プレスディフェンス及び4. オフボールディフェンス」に関する補足)

・ミニバスケットボールにおいて、ボールを持っている選手にトラップが仕掛けられる場面は次のとおりとする。

①ドリブルが行われている時、またはドリブルが終わった時

②パスが空中にある間に移動できる距離で、パスを受けた瞬間にトラップを成立させることができる時

③移動が容易に行える距離にある時(自分のマークマンとボールマンの距離の目安:2~3m)

→U15(中学生)では上記①~③を適用せず、全ての場面においてボールを保持している選手へのトラップは許される。

(10) 予測に基づくプレーについて

→U15(中学生)においては、マンツーマンディフェンスを行なっている前提において、予測に基づくプレーとコミッショナーが判断した場合、基準規則違反とは見なさない。

※予測に基づくとは、予測の根拠となる動きがあることを示す。

※マークマンを意識せずにエリアを守ることはマンツーマンの趣旨に反するため許されない。

※ミニバスケットボールにおいては、本項は適用しないが、「マンツーマンディフェンスの基準規則」通り、制限区域内のみで予測に基づいてボールを持っていないオフフェンス側プレーヤーをトラップすることは許される。